

モンゴル研修レポート

文・写真：清宮学



2024年8月27日（火）から6日間の日程Aコースと8日間の日程Bコースの2コースの日程で2024年トラベル懇話会の海外研修はモンゴルに行ってきた。

初めてモンゴルを訪れた感想を一言でいうと「もっと早くモンゴルに行っておけば良かった」ということ。そしてこうしてレポート書きながら思うことは「言葉や文章また写真ではモンゴルを伝えられない。モンゴルとは感じる。」ということだろう。

まだ残暑というより猛暑の8月下旬、8月27日から6日間と8日間の2グループ。6日間のAグループ9名、8日間のBグループ9名の総勢18名と添乗員で成田空港を出発。OM502便 成田空港13:55分発 ウランバートル18:30分着。成田から5時間、モンゴルは思っているよりもずっと近いところだ。草原と騎馬民族と大相撲のイメージしかないモンゴルは未知の国でずいぶん遠い国だと思っていたが直行便でわずか5時間の以外に近いアジアの国だった。

今回の参加者の中でモンゴルに行ったことがあるのは風の旅行社原社長と阪急交通社根本さん（昨年1度訪モンゴル）二人と添乗員の吉田さんだけだ。旅行、観光関係の経営者ですらほとんど訪れたことのない国がモンゴルだ。

モンゴルの基本情報を少し書くと国土は日本の約4倍、人口約350万人。人口は日本の約40分の1、気候は内陸性気候で夏場は朝晩の寒暖差が激しい、時差は日本-1時間。日本の4倍の広さに350万の人と3300万頭の羊が暮らすまさに広大な大陸の国である。

日中は日本より暑く、夜はかなり冷えるので日焼け止めと防寒着は必須ということだったが私たちの滞在中は天気もよく乾燥しているため湿度が低くカラッとして過ごしやすい気候だった。



モンゴルに到着してまず感じたのが空の大きさ。遮るものがなにもない広くて大きな青い空。そして地平線まで続く草原だ。目の前に広がる景色の下 1/3 が緑の大草原で上 2/3 が青い空。夜にはその青い空が地上まで星降るように広がる星空に変わる。360 度の星空だ。モンゴルには空、草原、星空、砂漠、動物、化石といったたくさんの自然があり地球の姿をまさに感じることができる。そして草原ではさわやかな風を感じる。



今回の旅の経験の中にゲルでの宿泊がある。今回 8 日間の日程ではウランバートル近郊のアルタンボラク村にある「ほしのいえ」で 2 泊、ゴビにある「エルデネキャンプ」で 1 泊、同じくゴビにある「ミラージュキャンプ」で 1 泊と 3 箇所 4 泊ゲルでの宿泊を体験した。宿泊をする客室ゲルには壁沿いに 3～4 台のベッドがあり、真ん中にテーブルとストーブがある。レストラン、トイレ、洗面所、シャワーは別棟にある。最後に宿泊したミラージュは豪華なゲルでトイレ、洗面所、シャワーも宿泊ゲル内に揃っている。夜はキャンプ気分を味わいながら快適に過ごすことが出来てトイレ棟への道中は満点の星空を歩く貴重な経験だ。



羊ばかり出てきたらどうしようかと少し心配をしていたモンゴルの食事はどれも美味しく日本人の味覚にも合うものが多かった。基本的にはサラダ、スープ、メイン、デザートのコース、味付けはシンプルな塩、胡椒のみメインは肉料理といった感じだ。今回は食堂ゲルの裏で生きた羊の解体を見学しその新鮮な羊の肉を食べる貴重な機会もあったが新鮮な羊は臭みもなく美味しかった。





モンゴルといえばやはり乗馬と遊牧民だろう。今回の旅では2日目に午前2時間、午後2時間、3日目の午前に2時間と多くの乗馬体験をすることができた。モンゴルも初めて乗馬も初めてという多くのメンバーにまずは乗馬の注意点と乗り方のレクチャーを受け遊牧民からひとりずつ私たちが乗る馬を手渡されていく。モンゴルの馬は体長もそれほど大きくなく穏やかということだが夏を除いて草原に放牧されていることもあり半野生のためちょっとした音や動きにも敏感に反応するそうだ。まだ馬を手渡しているのを待つ間に音に驚いた百木田会長の馬が急に疾走し始める。つられて私の馬も追いかけて並走する。急遽レースが始まる。そう競馬だ。隣の馬より前に出ようとお互いが速度を上げて走り続ける。まずい。騎手の二人は止まり方を知らない。必死に鞍に手を掛け振り落とされないようにバランスを取る。速い、初めて馬に乗ったが乗馬とはこんなに過酷なのか。もし馬が急に走り始めたら丘の方を目指して走れというレクチャーを信じて二頭は丘を目指して走り続ける。少し馬が疲れ始めたのを感じたとき遊牧民の若者たちが追いつき回り込むようにして馬を止めた。時間にして何分だったのだろうか。いきなり「大草原を思いっきり馬で駆ける」という夢が叶った。全員に馬も行き渡りこれから乗馬体験のスタート、既に疾走を経験した二人はとにかく突然疾走をはじめた光景を見ていたメンバーもみんな離脱せずに乗馬を楽しむ。このモンゴルの旅を通して百木田会長とは馬で絆が深まったのは間違いない。多少の落馬はあったが誰一人怪我もなく2日間たっぷりと乗馬を楽しむことができた。



ほしのいえの最後の宿泊の夜、ほしのいえの食堂でモンゴルのスタッフと夕食会を開催。今回、乗馬体験など一緒にガイドをしてくれたバチカが馬頭琴を演奏してくれた。初めて聞く馬頭琴の音色は優しく力強くモンゴルの草原と夜空に響く。素晴らしい演奏だった。

モンゴルの滞在は普段都心で生活する私たちにはない時間を思い出させてくれる。ゲルのある大草原はスマートフォンの電波も入らない。パソコンやスマートフォンのない時間。ゲルの前的大草原に寝転びながら心地よい風に吹かれる。心も体も軽くなりリラックスしていることを感じる。草原と風、青い空と星空、ゆったりと流れる雲と時間。贅沢な時間だ。



朝青龍と日馬富士に照ノ富士とほとんど力士しか知らなかったモンゴルの人。モンゴル風トラベル社長のハグワさん、ガイドさん、遊牧民の青年たちをはじめモンゴルの人と接していて感じたのは草原や砂漠を走り、動物たちと暮らし、ゲルで移動しながら厳しい気候を生きるモンゴル人の逞しさと優しさだ。また新しく出来た空港は日本が作ってくれたと日本に対して感謝の気持ちを伝えるなどとても親日的で日本語が上手な人が多い。

折角行くのならゴビまで行った方が良いというので少し無理をして8日間の日程に参加をしたが結果的には正解だった。往路はフライトで1時間、復路は車で10時間という移動ではあったがモンゴルの広さ、砂漠のはじまりや草原、砂漠、山と空という大自然のコントラストを感じることが出来た。



今回のモンゴル研修旅行は風の旅行社と現地モンゴル風トラベルがアレンジをしてくださった。

モンゴル風トラベル社長のハグワさんは日本に留学中に風の旅行社で1年アルバイトをし、その後1年間社員として働きモンゴルに戻る。モンゴルに戻ってからはモンゴル風トラベルを立ち上げて、30年間「風の旅行社」と「モンゴル風トラベル」は二人三脚で日本とモンゴルの架け橋となり日本からはモンゴルに日本人を送り、モンゴルでは日本人を引き受けてきた。草原にほしのいえという宿泊施設を作り現地ガイドとゲルのスタッフが迎えてくれる。30年間掛けて作り上げてきたツアーを体験することが出来て、多くのことを学び経験することが出来た素晴らしい研修旅行だった。





今回のモンゴル研修旅行はゲルでの宿泊、乗馬体験、食堂ゲルでの食事、バーゲルや移動中の時間など滞在中に多くの時間を一緒に過ごすことが出来て参加者に一体感が生まれた。デジタルデトックスというスマホのない時間がこうした時間を作り出したのかもしれない。





最後に今回の研修旅行では以下のイベントにトラベル懇話会として参加、訪問をした。

- ・モンゴル航空との夕食会
- ・在モンゴル日本国大使館表敬訪問、井川原賢特命全権大使との面談
- ・モンゴル文化スポーツ・観光省とのミーティング
- ・モンゴル観光協会、日本からのインバウンドを扱う旅行会社とのランチミーティング
- ・ゴビ観光協会、現地旅行会社との会食と交流会

